

ラウンドテーブル「早期教育は

必要か」に出席して

小川 博久

一、問題群の象徴としての「早期教育」

「早期教育は必要か」について、小児科医の毛利子来氏、桐花教育研究所の横山範子氏と論じあった。登壇者の一人として今さら何をかけばいいのかと迷う。自己の主張が明確だと思いついても、実際は山中で迷ってしまった小動物のような気持ちも残っているからである。だからこのラウンドテーブルを振り返ることは気分的に重い。当日、風邪をこじらせ、熱があつて出席した

ときの気分も今引きずっているのかもしれない。弁解がましいいことを言っても仕方ないので、私をそうした気分にした要因を振り返ってみよう。

まず、「早期教育は必要か」というテーマはこの十数年来、今日的課題として幼児教育関係者を引きつけてきたものである。またそれは、幼児期・児童期の子どもを持つ親にとつても身近な問題である。と同時に幼児教育関係者、特に、保育者や経営者にとつて自分達の保育実

践の原理を決定するにあたって避けて通れない問題であるともいえる。また保育研究者にとってもどのような幼児の育ちが妥当と考えるか、幼児観、発達観の決定を迫られるからである。

その意味ではこのテーマは学問的論争の対象となり得るかにみえる。このように「早期教育」があらゆる立場の人々の関心の的になり得る問題と映るのである。これはラウンドテーブルにあふれるばかりの会員を集めたことから明白である。

しかし、よく考えてみれば、様々な立場の人々から様々な関心を集め得る問題としての「早期教育」は明確な解答を用意し得る一つの問いと言うより、多様な問題性を含み得る一つの象徴あるいはスローガンと言った方がよいものである。たとえば、現代人の娯楽観の象徴としてのディズニールランドと言ったようなものだ。ディズニールランドはいろいろな立場の人々の様々な関心の対象であり得るとともに、それにはあらゆる問いの立て方と答え方が可能になるからである。

二、親と子の対幻想としての「早期教育」

「早期教育」は何よりもまず、親達の関心の的である。今日の学歴社会で自分の子どもの幸福を願うのが多くの親の気持ちである。中流意識をもつ多くの親にとって自分の家庭や家族の成員の幸福度を測る目安でもある。中流意識においては、学歴こそ自分の経済的社会的地位の上昇を可能にする階段であるとは教育社会学の常識である。こうした意識に強く支配された人々にとっては、「早期教育」に対する否定的評価が強力な情報として流布されないかぎり、あるタイプの「早期教育」は否定しても、もっと良い「早期教育」はあるはずだと考えるだろう。あるいは、他の子どもには否定的な評価となった情報があつたとしても、わが子にはそれは当てはまらないと思いたくなるであろう。ここでは子どもの幸福は自分の幸福をさらに家族の幸福と一体化される。このように「早期教育」が親と子の、あるいは個々の家族の対幻想として登場するかぎり、それは討論課題としてよりむしろ、個々の当事者の私事性として閉じ込めることが可

能なのである。それは、いかにフェミニズムの議論が世間で云々されていても、「妻は夫に従順であるべきだ」といった信念で暮らす夫婦がいて、それを幸福だと言われるならば、その夫婦は、フェミニズム論争と無縁で生きていられるのと似ている。そうした生き方が結局、破局を来すことがない限り、無風の中で生きられるのである。「早期教育」もしかりである。

しかも、「早期教育」は、こうした個々の当事者の夢を根絶やしにする結果は生まないのである。「早期教育」でしくじった子どももいれば、それで成功したと思わせられる結果も生むのである。もちろんその結果が「早期教育」のおかげであるかどうかは全く確かなことではないにしても、中流意識に呪縛されている人々にとっては、信ずるが勝ちなのである。かくて専門家や評論家が口をすっぱくして、「早期教育」の危険性を叫んでも、それは馬耳東風というわけである。

三、教育産業としての「早期教育」

現在、わが国は資本主義社会である。この社会では法の許す範囲で利益を追求することは原則として善である。需要として「早期教育」を求める人々がいる限り、その人々の需要に答えるような企業を起こすことは、社会の発展に貢献することだとされる。それは予備校の発展をみれば歴然たるものである。かくて「早期教育」を標榜して教育産業を起こすことは決して非難に当たらない。また「早期教育」という名辞を使わないにしても、敵しい受験を勝ち抜くための戦略を身につけるような準備教育をできるだけ早い年齢から教授するということを法的に非難する根拠はない。

そしてそうした仕事に従事する人々が、自己の営利的営みを同時にある種の社会的に望ましい仕事だと信じ、それをその人々の教育理念としてかかけることも十分考えられる。以前、予備校と私立大学を兼務していた人の結婚式に招待されたとき、大学で教育学を研究する友人よりも、招待された予備校の同僚の挨拶の方が、意気軒昂で日本の教育の将来を担うのはわれわれだという趣旨

の概をとばしていたのを思いだすのである。

予備校の教師が日本の教育を担うのはわれわれだと主張することにとにかく言うつもりもない。ただ、「早期教育」やこの種の「受験教育」を推進する人々の教育理念は、利益追求と不即不離であり、その理念を放棄し、別の理念を選択することは利益追求も放棄することにならぬ。ゆえに、自己の教育理念に疑念を抱いたり、反省したりすることは原理的に成立しえない。この人々の教育理念は他者との討論を通して変更する可能性はほとんど無いと考えてよいだろう。もし彼等が討論に参加したとすれば、自己防衛か自己正当化の論だけである。こういう人を相手に討論することは、信念 (Belief) 体系を批判する試みであり、はね返される可能性が大きい。ここにもまた深い疲労感を伴う状況がある。

四、教育論議の対象としての「早期教育」論の可能性

前述のような生々しい問題の立て方は除外し、もっと

軽いフットワークで「早期教育」を問題にできるだろうか。そのために必要な条件は、まず第一に「早期教育」の定義問題である。

ところが、結論的にいえば、「早期教育」論議のための有効なプログラム定義など簡単には見つかりそうもないのだ。まず第一に「早期」とはどういう意味か。「早期」とは、一般に考えられているより早くということである。つまり、教えられるべき内容と時期との間には、一般的に常識的見解が成立している。そしてその常識の根拠には、子どもの発達はこのようになるという通念がある。しかし、この発達観 (例えば、ピアジェの発達観とその流れ) は、この時期にしかじかのことを教えてよいかわるいかにについて答えてくれない。つまり、教えたり、働きかけたりすることと発達の筋道との間の因果関係は語ってはくれないのである。未だ発達心理学は教育論の根拠とはなりえていないのだ。

だとしたら、教えてみて、実際に子どもの能力の向上が認められたら、当然教えていくべきで、ただ見守って

いるより積極的でないのではないかと反論が生じるはずである。一九六〇年代のJ・S・ブルーナーの仮説はそうした立場を表出したものであった。しかし話はそう簡単ではなかった。実験直後にテスト結果で成績が向上したとしても、長期的にみて能力が向上したという証拠は何もあがらなかったからである。

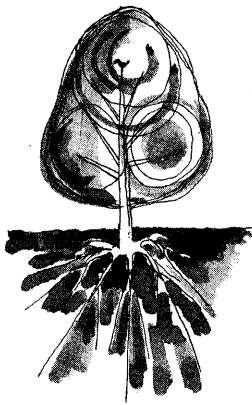
それよりも大きな問題は、個々の教授内容についてかに成績が上がったということが、その子どもの発達の全面にわたって望ましい育ちを保障することになるのかは全く明らかでないことである。つまり、実証主義的な立場で「早期教育」の妥当性について検討することに限界がきてしまうのである。

問題は再び、「早期教育」とは何かという出発点に立ち帰ってしまうのである。いったい何のために、何をどの程度まで「早く」教えたり、働きかけたりすべきなのか。まさに「早期教育」論議は気がついてみると出発点に舞いもどる迷路のようなのである。どこかで「早期教育」論議はこうした性格をもつものだという予感が私に

あったにもかかわらず、その火中に飛び込んでしまった自分のおろかさを痛感せずにはいられない。

五、ラウンドテーブルの風景を振り返って

今、思い起こしてみると、毛利氏の立場はきわめて明確であったと思う。氏は、「早期教育」は目的においても方法においても誤った教育運動であり、それは具体的に論証できるという形で、「早期教育」の思想性を撃つ



という立場で徹底していた。その運動の代表として公文式の理論を批判した毛利氏に対し、公文と私は同じではないので、毛利氏の批判と自分とは関係ないという立場で桐花教育研究会の教育の目的・内容・方法の妥当性を主張し続けた横山氏の見解も、企業でもある桐花教育研究所の代表として、自己の教育実践の正当性のために一貫性をもっていたといえる。

その両者の間でさまざまに続けたのは私ではなかったかという反省がある。もちろん、私の主張が一貫性を欠いていたとは思わない。しかし、自分が果たすべき役割が最後までクリアに見えていなかったという印象が強い。理由をさぐってみると、一つは、横山氏の主張と筆者の主張とに一番対立点があると予想し、そこに争点を置いて討論を展開すれば、ラウンドテーブルとしてフロアも参加でき盛り上がるのではないかと考えていたことである。たしかにその点では一応の盛り上がりはあった。しかしそれを通じてこの問題の何が論じられるべきかは少しも明らかにならなかったからである。もう一つ

は、その点での予測の確かさが私に欠けていたこと、つまり横山氏からの反論、「早期教育不必要論」への反批判が全くなかったことである。その点は予感されていたにもかかわらず、私にはきちんと読みきれていなかった。

同時に、毛利氏と私の意見とは「早期教育不必要論」の立場で類似していたため、毛利氏との争点も見いだせずに終わった。最後に毛利氏から、私も横山氏も幼児期の遊びや学習を真面目にとらえずぎていないか、できるといいことだと考えすぎて、いいかげんに済ましてしまうことも大切ではないかといった投げかけがあった。この点は、私も大いに論じ合いたいところであったが、反論の時間もなく、残念であった。少なくとも、こんな議論では、プラトンの言うシンポジオン（饗宴）にならないという思いと、討論によって見えてくることの少なさに疲労感だけで帰宅したように思う。

六、「早期教育は必要か」はどう論じられるべきか

ぐちをこぼすだけでは、何の役にも立たないだろう。この討論への参加を通して、もしこの種の議論を今後やるとしたらどのようにすべきかについて私見を述べ終わるとしよう。

まず第一に、この種の議論を対幻想の問題ではなく、共同幻想論として論ずる必要がある。そのためには物理学者で幼児教育にも強い関心をもつ新井氏がフロアから発言していたように、人類の将来の展望の問題として論ずる必要がある。そうすれば、自分の子どもに「早期教育」を受けさせるべきか、それは効果があるか否かといった議論を一応括弧にくくることができる。ではそこで論ずべき課題は何か。

一つは、現在の「受験教育」「早期教育」、塾教育の隆盛は、専門家（教師）が教え（主として言葉）を媒介にして行われる知識伝達——学ぶという近代の学校が生み出した量産型の学習方式の肥大化であり、その方式を低年齢にまで拡大した結果であり、そのことの是非が問われているということである。

二つは、幼児期の成長過程で行われる学習は、二本足歩行、言語獲得、社会性の学習を含めて、観察学習（見まねる）が中核となっており、そこに言語による教授型の学習を無制限に導入することは、ヒトの進化のあり方としてマイナスにならないかということである。

三つは、これまで幼児期の教育で大きな役割を占めていたのは家庭であった。消費文化の普及は家事を省力化し、家事労働を簡略化した。多くの作業遂行を情報処理で解決できるようになった親達にとって、幼児といえども、自らの生きる論理をもった存在とつき合っていくことは、心身共にストレスを拡大させる仕事になり、育児不安を増大させた。にもかかわらず、我が子の成育に深い関心と愛情をもっている場合、多くの費用を使っている「専門家」に我が子の教育を依頼し、子どもの将来を保障すると共に、育児不安を解決しようとする。ここに子育ての「消費行為化」が生まれる。この傾向は、親と子の関係の中で形成されるべき人間の資質の面で欠落を生むのではないか。人間の相互理解、連帯感、思いやりな

どは、十分に育ちうるのであろうか。何よりも共同生活の中で親の子どもに対するこのような面での形成力を低下させるのではないか。

このように考えると、「早期教育」の問題は学校教育で行われている「教え——学ぶ」という学習スタイルの肥大化は妥当かという問題であり、人類の将来にとって、子どもの学びのあり方はどうあるべきかの問題として設定すべきであった。とすれば、私の横山氏への批判は、まず現代の学校教育の支配的学習観である「教え——学ぶ」というスタイルを無原則に拡大することは、人の育ちのあり方として妥当かという問いとして設定すべきであった。特にこれまでの学校教育での学習観では、既知者（成熟者）||教師、と未知者（未熟者）||子ども、という関係性を固定化してきた。その中で、自立的学習者としての子どもの存在、表現者としての子どもの能力を低くとらえてきた。そのことで子どもの自己形成力を低く評価し、大人が子どもとの関係で管理者、統制者としての役割を益々増大させてしまったという問題への反省

的討議が必要であった。

以上のような形でのディスカッションを可能にするために、まずすべきは、私自らがそうした学校教育での学習観に手を貸してきたという事実への省察が必要であろう。その意味で、フロアの滝坂氏が、「早期教育」といわれる動きを批判すべきだということを前提にしてラウンドテーブルが行われるとしたら、それは望ましくないといった意見は、改めて傾聴に値すると思う。なによりも自らの内なる「学習観」と、その前提にある大人——子どもの関係性への問い直しが求められるからである。私にとってラウンドテーブルに出席したときより、ここで、ラウンドテーブルについて反省の機会を与えられたことの方が学びになったことを感謝したい。

（東京学芸大学）